

二因説的認識と客観性のゆらぎ
Fluctuation of Objectivity and Epistemology
Based on the Theory of Two Causes

渋谷仙吉（山形大学理学部）

近代自然科学成立以来、客観性が異常に重視されてきたが、近年、渡辺(1978)、村上(1979)等によって「客観性のゆらぎ」が指摘されている。本研究では、二因説的認識に基づく対話的観測で、客観性が本質的に揺らいでいることを指摘する。

端初での根本原因数が1つで、この第一原因からすべてを説明する因果説を一因説とよぶと、西欧での因果論はこの一因説に属しているとみなされる。これに対し、仏法の因縁論は「内なる因と外なる因としての縁の相互作用により現実の結果が生じる」というので、二因説とよばれている(池田、1973)。

ここで、二元論は端初に相互に相対し、独存する2つの実体、又は原理の存在を認めて論理を展開するので一因説に属し、二因説とは全く違うことに注意しなければならない。同様に、一元論、多元論そして素朴实在論なども一因説に属するとみなされる。

認識の起原と端初での根本原因数の関係から我々は認識論を一因説的認識と二因説的認識に分類する。一因説的認識は外因重視で客観性の強い受動的認識と内因重視で主観性の強い能動的認識に分けられる。

二因説的認識は人間にもともと具わっている認知能力(六根)と対象に相当する六境との相互作用の結果によって知識(六識)が成立するという仏法認識の異名でもある。先験的感性(悟性)は六根に対応し、現実の対象は六境に対応し、現象は六識に相当すると推定すればI.カントの先験的認識論は二因説的認識にきわめて近いと推測される。

この二因説的認識に基づいて対象を認識・測定する対話的観測の過程では客観(受動)と主観(能動)は対をなし相補的關係になり、客観性は本質的にゆらぎ、相補的に主観性も含み、単なる客観性だけの時より真理・実相の理解・把握が可能となることが提案された。

参考文献

渡辺慧、認識とパターン、岩波新書、1978.

村上陽一郎、新しい科学論、講談社、1979.

池田大作、スコラ哲学と現代文明、東洋学術研究、vol.12, no.2, 1973.